

# 語りを構造化する引用：日本語日常会話における引用標識「とか」の分析

## Quotations for Structurizing Tellings: Japanese Quotation Marker “toka” in Everyday Conversation

白田 泰如

Yasuyuki USUDA

国立国語研究所

National Institute for Japanese Language and Linguistics

usuda@ninja.ac.jp

### 概要

本研究では日本語日常会話において、物語の語りの中で生じる引用発話をマークするのに用いられる「とか」を分析する。データは『日本語日常会話コーパス』モニター公開版から会話断片を採取して使用し、会話分析 conversation analysis の手法を用いて分析する。分析の結果は以下である。「とか」は引用を新奇なものとしてマークするものであり、複数種類の引用マーカはそれぞれの引用発話をどのような位置づけで物語に配置しているかを可視化し、物語を構造的に理解可能にする装置である。

**キーワード：**会話, 相互行為, 引用, 会話分析 (conversation analysis), 『日本語日常会話コーパス』

### 1. はじめに

日本語の会話ではしばしば、「とか」という複合助詞 [1] を用いて、第三者や自分自身の過去の発話、あるいは仮想的な発話を引用するふるまいが見られる。たとえばデータ 1 のようなものである<sup>1</sup>。

データ 1 は、親しい友人数人で食事中の会話の一部である。A が会場のレストランに着くまでに電車で遭遇した出来事について語っている。断片の直前までの部分では、幼い子供を連れた男が子供を肩車したまま電車に乗ろうとして、子供を電車のドアの梁に強打したということが話されている。断片はその語りの続きである。> を付した行では「とか」を用いて、A が遭遇した出来事の登場人物である「お父さん」および「お母さん」の発話が引用されている。

「とか」は従来、「A とか B とか」のような形で類似のものを並列する表現を作るために用いられるものとして扱われてきた [2, 3]。これに対し、並列的な構

データ 1 [会話 ID: C001\_001 284.727 秒-302.412 秒]

- 1 A <うわー>つ[て泣き始め[て:。(両手を肘前から顔の高さまで上げながら、「わ」の時点で手を開く))
- 2 D [あ:..... [::。
- 3 E [そりゃそうだよね:。
- 4 B ssshhhh[hh
- 5> A [でおか [あさんがうそで] しょう?
- 6 B [お父さん。 ]
- 7> A とか [言っh[て h hahahahh。
- 8 D [hhhahahahahahahahaha
- 9 B [hahahahahahaha
- 10 E た h[し h か h に h。
- 11> A [何やってんの:とか言って [hhh。
- 12 D [やり
- 13 s[o うでも お父さ [ん。
- 14 E [た:しかに。
- 15 E [ひ [ど:い。
- 16 B [お父 [さ:ん。
- 17> A [ね hh[うわー ごめんとか
- 18> (言って)。  
(0.2)
- 19 A うわー 男自分のことしか考 [えてな:いと
- 20 E [そうだね: もう。
- 21 D [(考え) てな:い。
- 22 A 思って:。
- 23 D ほんとそうだよ [ね。
- 24 A [うーん。  
(0.3)
- 25 D そうだよね。

文を作らず、類似のものが他にもある(「一部例示」)ことを示すのでもない「卓立的提示」[4] という用法は、比較的近年において主に「若者」に用いられるとされる。こうした用法のうち、特に第三者や自分自身の発話を引用するマーカとして用いる用法についてはあまり研究されておらず、とりわけ実際になされた会話に基づき、会話の中でのふるまいを経験的に分析した研究は管見の限りなされていない。本研究の目的は、「とか」というマーカを用いた引用によって、会話の中で何が達成されているのかを、個別の会話を質的に検討することにより明らかにすることである。

<sup>1</sup><>に挟まれた会話は比較的遅くなされていることを示す。縦に(おおむね)揃った[は会話開始の重複を示し、]が終了の重複を示す。:は母音の延伸、hは呼気音、()は不明瞭な部分を示す。(0.2)などは数字分の間隙を表す。

## 2. 先行研究

「とか」は従来、類似のものを並列する構文を作る文法要素として扱われてきた [2, 3]。これに対し、並列的に用いない用法にも近年は焦点が当たりつつあるといえる [4, 5, 6, 7, 8, 9, 10]。

このうち、1. で言及した [4] では、並列的用法以外で単独で使われる用法として、対人配慮的な「断定回避」の用法を従来のものとして挙げ、これと対置して近年の用法として「卓立的提示」を挙げている。[4] は2000年シドニーオリンピックにおける選手へのインタビューの中で見られた例として「銅メダルとか取っちゃって」というものを挙げ、「若者世代に拡張されている「とか」には、「ぼかしした言い方・自身のない言い方」ではなく(104)「評価の際立ったものが集合として想定され、その一部例示(105)」がなされる用法であると述べている。

また、[5] は並列の「とか」と、とりたて助詞の「も」との用法を比較している。「も」はすでに話題に出ているものごとの集合から話題のものを取り出すのに対し、「とか」は新情報であっても用いられるとする。また、類例の集合のうちの一つを取り出していることが容易に想定される場合だけでなく、類例が想定しにくいものについても用いられ、「なんか」と交換可能な場合があると述べている。加えて、「なんか」と異なり、「とか」にはとりたてられたものについての否定的評価のニュアンスはないとしているが、この点について [9] は、「一般的に話し手にとって不利である事柄(69)」が後続するという傾向があるとし、「話し手の予想や期待から外れる事柄」を導く「意外性の「とか」」として位置づけている。

一方、[9] には引用マーカーとしての「とか」に言及があるが、「引用用法」として括り出し、「意外性」や「ぼかし」といった用法とは区別しており、また主たる議論の俎上に上がっていない。そのため、引用に用いられる「とか」がどれに該当し、どれには該当しない、あるいは別の意味や効果を持つのかといったことも述べられていない。本研究の4. では、引用に用いられる場合に焦点を当て、実際の会話の中で用いられた例を分析し、これまで述べられてきた用法が会話の中で引用に用いられる場合にも当てはまるのか、異なる部分があるとしたらそれはどのような点か、について議論したい。

## 3. データと方法論

本研究で扱うデータは、国立国語研究所において構築が進められている『日本語日常会話コーパス

(CEJC)』モニター公開版 [11] である。CEJC は日常生活における会話の多様性をできるだけ反映し、さまざまな研究に利用可能な形で提供するため、音声および映像と文字起こしテキストを利用可能な形で提供するほか、以下のような特徴を備えるよう設計されている。

- **大規模**：200 時間分の会話データ（完成時、モニター公開版は 50 時間）
- **代表性**：年齢・性別・属性・会話の種類の均衡性を考慮
- **検索性**：形態論情報（品詞、文中の位置、発話時間など）

上記の自然会話データについて、会話分析 conversation analysis [12, 13] の方法論にもとづく分析を行う。会話分析とは、「人が日常生活の中で従事する多種多様な実践的諸活動——会話、会議、診察、面接、ゲーム、授業、接客等々——を構成する出来事や人びとの振る舞いが、いかにしてその場で常識的に合理的な理解可能性を備えるものとして成立しているか、この秩序を産出するための社会成員の「方法」[14] を、発話をはじめとする相互行為中の振る舞いの観察を通じて明らかにする」方法論である [15]。我々はやりとりを行いながら日常のさまざまな活動を行なっている。そうした活動の中のやりとりに用いられることばや身振りなどのふるまいは、すべてがそうではないにせよ、その活動を構成するひとつひとつの行為や活動全体を成り立たせるための参加者の指し手になっているものを含んでいる。会話分析が採用する分析方針は、どのようにしてそうしたふるまいが行為を構成する指し手になっているのかを明らかにすることである。

## 4. 分析

1. のデータ 1 をもう一度見て欲しい。この会話断片では A が遭遇した出来事を、時系列的に順を追って話している。このような会話の状態を物語 (storytelling) [16, 17] と呼ぶ。この断片における物語において A は、子供の父親らしい人物が子供を電車のドアの上部に打ちつけるという、ある種の特異な事態を提示したのに続いて、その事態の当事者の発話を引用して提示している。「とか」による引用は 5 行目-7 行目、11 行目、17 行目-18 行目に出現しており、それぞれ出来事の登場人物（「お母さん」および「お父さん」）の発話が「とか」によって引用されている。一方、その出来事を目撃した語り手自身の所感が述べられている 19 行目-22 行目においては、引用マーカーは「と」が用いられている。

「とか」でマークされる5行目-7行目, 11行目, 17行目-18行目の引用は語られている出来事の当事者の発話であり, 出来事の主たる構成要素である。この出来事自体がAの期待や予想に反したもので, それゆえ語られる価値をもっていると考えると, 出来事における当事者のふるまいは, 先行研究 [5, 9] の指摘通り, 予想に反したことがらとして提示されているといえる。そうした要素が「とか」で提示されているのに対し, 19行目-22行目は出来事に対する語り手の所感であり, すでに提示された出来事から当然の帰結として語り手のうちに生じたものとして提示されている。それゆえこの発話は出来事の当事者のふるまいほどの卓立性をもたず, 「と」というマーカーで提示されていると考えられる。

これらのことを整理すると, 物語における新奇なことがらを構成する発話引用には「とか」が用いられると考えられる。もうひとつデータを見てみたい。データ2は親しい友人同士ふたりがレストランで食事をしながら会話をしているところの一部である。この断片の時点での話題は, Aの大学生になる息子が最近ガールフレンドと関係を解消したというものである。この断片より前の部分でも, 息子がAに, ガールフレンドとの関係に悩み, ついに関係を解消するに至ったと報告したことが語られている。またAはかねてよりBに, Aの息子のガールフレンドはAの息子に対してあまり協調的でないという話をしていた。

データ2では, 「とか」による引用と「って」による引用がみられる。2行目は1行目に返答せず, 改めて息子がガールフレンドと関係を解消したことをどのように報告したかの説明を開始している発話である。息子がAに報告したやりとりの説明は10行目まで続いている。他方, 10行目までの説明より後の発話の引用では, 12行目, 15行目, 16行目, 17行目-18行目, 21行目-22行目, 23行目の発話で「とか」が用いられている。

データ2では, 出来事を構成する発話と出来事に対する語り手自身の見解という対比と引用マーカーの区別は一致せず, むしろ先行する時点ですでに語った内容の再説明と聞くことのできる部分で生じる引用発話は「って」でマークされ, 新たに付け加えられたことからは「とか」でマークされていると見ることができ。再説明と聞くことのできる部分のうち, 10行目は7行目から直前までの引用発話に対する, 語り手自身の仮想的な反応である。これに対する11行目により, 語られた内容についてBが理解したことに加え, Aがその出来事に対してとった態度も理解したことが

データ2 [会話 ID: C002\_016 2540.761 秒-2574.958 秒]

- 1 B そっか: 自分からゆったのかな: hhn  
(0.6)
- 2 A いやもうできいやあれこう続けられない  
3 ねってこう (Dン) 僕が何何ゆっても  
4 そうゆうふうによわれるん  
5 A だっ[たらもう続けられないねって。  
6 B [ふーん うん うん。  
7 何話してもさ ずっと黙ってんだよ とかゆつ  
8 て。((大きめの音調の高低))  
(0.4)
- 9 何時間も黙ってたからって。  
(0.3)
- 10 あんたもよく耐え [てたね h つh て h。  
11 B [ahhahahahaha  
12> A こ:の二人ね ちよ すごい粘り強い [なとか思っ  
13 B [すご:い:。  
14 A たんだけど。  
15> なんか 何時間?  
(0.6)
- 16> A 二時間ぐらいは 二時間 もっとだったかな  
17> なんか (0.4) ずっと黙ってるんだよとかゆつ  
18 て。  
19 えっ  
20 B k え::[:。  
21> A [° えっ° (.) その場からあたしは絶対  
22> 逃げ出したいくなるけどな:とか思いながら。  
(笑い顔, 肩をすくめて小刻みに左右に体を揺らす)  
(.)
- 23> A すごいね 根性あるね とか思いながら。  
24 B へ……………。  
25 A だからもう別れてきたってゆわれて  
26 B そう…。

わかる。

ただし, 再説明と聞くことのできる部分も, 断片より先行する部分の会話における語りを類似の表現で繰り返しているわけではない。同様に「とか」でマークされる発話についても, 息子がAに報告したことと, それについてA自身が抱いた所感とがあり, 内容そのものの性質や地位による違いは明確ではない。むしろ, 引用発話の連続によって語りを構築する上で, 語りのどのような部分を構成するパーツとして扱うかという, 当該引用発話に対する語り手の態度が反映されているものと考えられる。このことを例証するため, 図1および図2を見てみたい。7行目に比べて21行目は演技的な音調で発話され, 上半身全体による動作を伴っている。このことにより21行目がより強調された発話方法をとっていることがわかり, それだけこの発話において提示されているものが新奇なものとして扱われていることを示すといえる。



図1 7行目「ずっと黙ってるんだよ」



図2 21行目「絶対逃げ出したいくなるけどな」

## 5. まとめと今後の課題

本研究では日本語日常会話において、物語の語りの中で生じる引用発話を「とか」でマークする場合について、他の引用マーカーを使用する場合との対比に基づいて分析した。「って」は語りの進行において予想可能な帰結を述べるのに対し、「とか」は新奇な事柄を提示するのに用いられる。語りの語り手はこれらのマーカーを用いて、引用発話の連続によって物語を構成する上で、それぞれの要素をどのような位置づけで配置しているのかを示し、物語を構造化している。

先行研究においては、「とか」は「なんか」「なんて」との交換可能性が指摘されているが、「なんか」は引用マーカーとしての用法は持たない一方、「なんて」は類似の用法が可能であるように思われる。しかし、「とか」と比較して、引用部分を卓立的に扱うという機能については限定的であるように思われる。このことは、「とか」の卓立的提示の機能は、複数の候補の中から一つを選ぶという根源的な機能からのみ生じるわけではないのではという推測をもたらす。

この点について、発話の引用に着目することで新たな洞察が得られると考える。発話を「とか」でマークして引用する場合、可能な候補がいくつもあるのではなく、原文の正確な引用ではないという含みを持つといえる。このように不正確さの含みがあることで、元発話の一語一句が問題なのではなく、その発話がどのようなものとして物語の中で扱われるかということにフォーカスすることに繋がるのではないか。この点について、稿を改めて考察したい。

## 謝辞

本研究は、国立国語研究所のプロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」(プロジェクトリーダー・小磯花絵)による成果に基づいて行われた。また日本学術振興会科学研究費交付金若手研究「日常会話コーパスを用いた「課題」に基づく会話の分析:定量・定性の両面から」(研究代表者:白田泰如, 課題番号 20K13019)の助成を受けて行われた。

## 文献

- [1] 砂川 有里子 (1987) “複合助詞について (助詞指導の問題点<特集>),” *日本語教育*, no. 62, pp. 42-55.
- [2] 寺村 秀夫 (1991) *日本語のシンタクスと意味 III*, 東京: くろしお出版.
- [3] 森山 卓郎 (1995) “並列述語構文考-「たり」「とか」「か」「なり」の意味・用法をめぐって-,” in *複文の研究*, 東京: くろしお出版, pp. 127-149.
- [4] 天野 みどり (2001) “若者ことば: 銅メダルとことば (特集 2 「少年」の現在),” *東西南北*, pp. 100-107.
- [5] 中俣 尚己 (2008) “日本語のとりたて助詞と並列助詞の接点-「も」と「とか」の用法を中心に,” *言語文化学研究*, vol. 3, pp. 153-176.
- [6] 大和 啓子 (2010) “「とか」による例示について,” *筑波応用言語学研究*, vol. 17, pp. 17-27.
- [7] 劉 曉傑 (2011) “ぼかし表現「とか」についての考察,” *相愛大学人文科学研究年報*, vol. 5, pp. 48-35.
- [8] 洞澤 伸 and 奥村 佳奈 (2015) “若者言葉「とか」の強調用法について,” *岐阜大学地域科学部研究報告 = Bulletin of the Faculty of Regional Studies, Gifu University*, vol. 37, pp. 1-17.
- [9] 住吉 紅実 (2015) “「とか」の機能的分析,” *英語学英米文学論集*, vol. 41, pp. 63-79.
- [10] 山下 悠貴乃 (2017) “配慮表現としての「とか」について,” *筑波大学地域研究*, vol. 38, pp. 127-138.
- [11] 小磯 花絵, 天谷 晴香, 居關 友里子, 白田 泰如, 柏野 和佳子, 川端 良子, 田中 弥生, 伝 康晴 and 西川 賢哉 (2020) “『日本語日常会話コーパス』モニター版の設計・評価・予備的分析,” *国立国語研究所論集*, vol. 18, pp. 17-33.
- [12] Harvey Sacks, Emanuel A. Schegloff and Gail Jefferson (1974) “A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation,” *Language*, vol. 50, no. 4, pp. 696-735.
- [13] Emanuel A. Schegloff (2007) *Sequence Organization in Interaction: A Primer in Conversation Analysis*, Cambridge: Cambridge University Press.
- [14] Harold Garfinkel (1967) *Studies in Ethnomethodology*, Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall Inc.
- [15] 平本 毅 (2018) “会話分析の広がり,” in *会話分析の広がり*, eds. 平本 毅, 横森 大輔, 増田 将伸, 戸江 哲理 and 城 綾実, 東京: ひつじ書房, pp. 1-33.
- [16] Gail Jefferson (1978) “Sequential aspects of story telling in conversation,” in *Studies in the Organization of Conversational Interaction*, ed. Jim Schenkein, chap. 9, New York: Academic Press, pp. 213-248.
- [17] Jenny Mandelbaum (2012) “Storytelling in conversation,” in *The Handbook of Conversation Analysis*, eds. Jack Sidnell and Tanya Stivers, chap. 24, West Sussex: Wiley-Blackwell, pp. 492-507.